

世の中の選択肢を広げたい

趣ある町家に、量り売りの炭やまき、間伐材を粒状に加工した木質燃料ペレットを使うストーブが、おしゃれな雑貨のように並んでいる。

身近な森から森林バイオマスを提供し、心癒やす火のある暮らしを広げたい。二〇〇六年、仲間と二人で木質燃料の販売から全国各地の森林資源のPRや森を生かした町づくり構想まで幅広く手がける会社を興した。その設立のあいさつに「選択肢を広げることが役割」とつづった。

「本当に豊かなのは選択肢の多い社会だと思う。環境にいい暮らし方を望んでも今は頑張れる人のコースしかない。選択肢を増やすことが森林バイオマスの普及につながる」

森に関心を持ったのは学生時代。最初は海外の熱帯林だった。東南アジアですさまじい伐採の現実を見た。フィリピンでは紙の原材料のため。マレーシアではパーム油のヤ

「森林エネルギーの火をあちこちにともしたい」。願いを込めて社名には「H i b a n a」とつけた（京都市上京区）



松田 直子さん（32） 〓下京区

シの植林のため。広大な伐採地の向こうに、日本の消費社会と資源利用されず荒れていく山が見えてきた。大学院で森林資源を使った町づくりを研究テーマにした。コンサルタント会社で働きた。次世代に豊かな森を残したい。必死に山を守る林業家の思いに触れた。市民グループには森を何とかしたいと共感した人たちが世代を超えて集まってくれた。

「森の再生」一生のテーマに

みんなで知恵を絞り形にしていく市民活動の魅力を味わう一方で、現実のニーズに即応できる会社組織が必要と決断。出資金は自分の蓄えが半分、あとは家族や仲間が応援してくれた。

八十歳を超えた今も北山で炭を焼き続ける生産者がいる。ペレットストーブを使いたいと相談に訪れる人がいる。山のひととまちの人をつないで、森の恵みに経済的価値をつけ、森の再生につながる輪を作りたい。遠くはるかな目標。でも、一生のテーマと決めている。（勝聡子）

言葉
胸に